

あこがれを後輩達に

岐阜県

悟道館後藤道場

中学2年 江 幡 佳那子

まだ剣道を始めていなかったとき、私は剣道も悟道館も大嫌いでした。土日祝日は大会があり、兄弟や母は朝早くから家を出ていきました。平日も一人お留守番という訳にもいかず、遅い時間まで練習について行きました。その半面で、ご飯を食べに行ったり、お散歩に行ったりと、母が私のために時間を作ってくれることもありました。今思えば私のことも大切にしてくれていたということに気づくことができますが、幼い時はそのことに気づくことができなかつたのです。そのため、母達がない休日や、眠くて仕方のない稽古日が嫌いでした。だから、なぜ剣道を始めようと思ったのかは、私自身よくわかっていません。

兄弟全員が剣道をやっているということもあり、素振りの時の足さばきや竹刀のにぎり方などの基本には多少の知識があつたため、先生方の細やかな指導に耳を傾けていませんでした。私のやる気を引き出すためのほめ言葉に満足して、悪いところを見ようとせず、ただ楽しく剣道をやっていたのです。

そんな私の行動を変えるきっかけを与えてくださったのは、道場の先輩方でした。稽古に全力でのぞむ姿に初めて目を向けたとき、私は同じ空間にいながらそこに気づけなかつた自分が、とても恥ずかしくなりました。しかし、それに気づいた時にはもう、暗い影が私たちの日常に迫ってきていたのです。

「新型コロナウイルス」当たり前だつた練習や学校はなくなり、終わりのない休みがどれほど辛く、さびしいものなのかを知りました。長い間を開けた久しぶりの練習はものすごくきつく感じましたが、仲間と一緒に顔を合わせて練習できることの幸せを実感することができたのです。中でも一学年上の先輩方の存在は、私にとって大きなものでした。

練習が再開したと同時に小学生のキャプテンを任された私は、先輩方がやってきたことを「自分にもやれるのだろうか」と不安に感じていたのです。頼れるキャプテンとして後輩達を引っ張っていくためには、どうしたらよいのかを考えました。そして、声を精一杯出すことを決めたのです。声は、初めて先生にほめていただいた私の小さな自慢でした。

後輩達に支えてもらいながら過ごしたキャプテンとしての日々は、私の大きな力です。そしてその日々は私に、改めて先輩方の存在の大きさを教えてくれました。いつも「ファイト」と声を出す先輩。周りを気遣って行動できる先輩。休憩のときにいつも声をかけてくれる先輩。技のポイントをわかりやすく教えてくれる先輩。強い気持ちで試合にいどむ先輩。とても強くてカッコいい、こんな先輩方の当たり前は、今まで私のお手本となり、たくさんのことを教えてくれました。だからこそ、その「当たり前」を私の当たり前にしようと思ったの

です。

今いる先輩方からも、もっと前に卒団していった先輩方からも、私はたくさんのもをもらいました。次は、私達がそれを後輩達につなげなくてはなりません。私が見たあこがれを、今いる後輩達にも、まだ見ぬ後輩達にもつなげるために、これからも、精一杯努力していく決意です。

目標をくれてありがとう。

支えてくれてありがとう。

教えてくれてありがとう。

いつもそばにいてくれて、

本当にありがとう。

大嫌いだった剣道も悟道館も、先輩方のおかげで、私の宝物になりました。